

名作再読、拾い読み(4)

『ハツカネズミと人間』 ("Of Mice and Men")

小澤 文彦

ジョン・スタインベック (John Steinbeck, 1902-1968) は、アメリカ合衆国カリフォルニア州サリーナス生まれの作家です。幼い頃からドストエフスキーの『罪と罰』、フロベールの『ボヴァリー夫人』、『欽定訳聖書』などを読み耽る文学好きの少年でした。1920年、スタンフォード大学に入学し海洋生物学を学びましたが、学位を取得せずに中退し、様々な職業を経験した後作家となる決心をしました。1929年、『黄金の杯』でデビュー。1939年には最もよく知られている『怒りの葡萄』("The Grapes of Wrath")を発表します。1933年以降、ミシシッピ川以西の中央大平原を襲った度重なる砂嵐とトラクターによる農耕の機械化により土地を奪われた農民達の苦難を扱い、貧しいジョード一家がオクラホマから希望の土地カリフォルニアを目指して移動していきますが、そこでも悲惨な目に遭うといった内容の小説です。1940年、ピューリッツァー賞を受賞しました。この小説は同年にジョン・フォード監督、ヘンリー・フォンダ主演で映画化され、オスカー賞を獲得します。この作品で、スタインベックは一躍その名声を不動のものとし、1952年には、『エデンの東』("East of Eden")を発表しましたが、1955年にこの小説もエリア・カザン監督、ジェームズ・ディーン主演で映画化され、大ヒットを記録します。1962年にはノーベル文学賞を受賞しました。1968年、ニューヨークで心臓発作を起こして死亡。66歳でした。

今回は、彼の中編小説『ハツカネズミと人間』("Of Mice and Men", 1937)をお薦めしたいと思います。このタイトルはスコットランドの国民的詩人ロバート・バーンズ (Robert Burns, 1759-96) の詩 "To a Mouse" (1785) の第7節――

The best laid schemes o' mice and men
Gang aft a-gley,
An' lea'e us nought but grief an' pain
For promis'd joy.

ハツカネズミと人間の このうえもなき企ても
やがてのちには 狂いゆき
あとに残るはただ単に 悲しみそして苦しみで
約束のよろこび 消えはてぬ
(大浦暁生訳)

からとられており、小説の悲劇的内容を暗示しています。

(あらすじ)

カリフォルニア州サリーナス近くのソルダードが舞台です。頭は切れるが小男のジョージと頭は弱いが力持ちの大男レニーは、お互いにいたわり合う仕事仲間ですが、いつも農場を転々として渡り歩かなければなりません。というのは、レニーはピロードみたいな手触りの良いものが大好きで、衝動的に女の人のきれいな服に触ってしまうということを繰り返してきたからです。

今回働くことになった農場では、親方の息子であるカーリーの妻が飯場にやって来て男達と話をしたがるのをジョージは警戒し、レニーが彼女の姿にうっとりするのをとがめて決してかかわるなど注意します。しかし彼女はそと馬小屋に入ってきて、子イヌを撫でているうちに死なせてしまったことを嘆いているレニーに話しかけます。そして、自分の髪の毛は柔らかいから触ってみるように誘い、レニーの手を取って自分の髪の毛を撫でさせます。しかし直ぐに、頭がクシャクシャにされるのが心配になって彼女は騒ぎ始めます。パニック状態に陥ったレニーは、悲鳴を出させまいとして誤って彼女の首の骨を折ってしまいました。

カーリーや他の男達は銃を持ってレニーを追跡します。ジョージは、もめごとを起こしたら落ち合うことにしていたサリーナス川のほとりの茂みに急ぎます。残酷なリンチから救うには、レニーを自分の手で殺すしかありません。ジョージはレニーのお気に入りの話をします。「おれたちは小さな土地を持つ。一頭の雌牛を飼う。それにたぶん、ブタを一頭とニワトリを何羽か飼う…」「ウサギの世話をする」「そして、土地のくれる一番いいものを食って、暮らす」。それは、二人にとって叶わぬ夢でした。

ジョージは拳銃を取り出し、激しく震える手を落ち着かせてから、レニーの後頭部目がけて引き金を引きます。

男ばかりの登場人物の中で紅一点のカーリーの妻は、男を破滅させるタイプの女性です。ジョージとレニーの友情と夢、また二人の夢の話を聞いて周りの男達が抱いたかすかな希望さえも完全に打ち砕いてしまうのですが、次のようにあでやかな姿で登場します。

Both men glanced up, for the rectangle of sunshine in the doorway was cut off. A girl was standing there looking in. She had full, rouged lips and wide-spaced eyes, heavily made up. Her fingernails were red. Her hair hung in little rolled clusters, like sausages. She wore a cotton house dress and red mules, on the insteps of which were little bouquets of red ostrich feathers. "I'm lookin' for Curley," she said. Her voice had a nasal, brittle quality. (*1)

(長方形をした戸口の日ざしがささげられて、二人は目をあげた。一人の女がそこに立って、中をのぞきこんでいる。ぶあつい唇に口紅をぬり、パッチリした目に濃いアイシャドウをつけている。指の爪もマニキュアで赤い。髪は小さなカールがむらがり、ソーセージのようにぶらさがっている。もめんのふだん着を着て、赤いサンダルをはいているが、サンダルの甲にはダチョウの羽の赤い小さな飾りがある。「カーリーをさがしている」鼻にかかった細い声だ。)(*2)

男の友情と夢の挫折を描いたこの作品からは、貧しく弱い人間達に注がれた作者の温かい眼差しが感じられ、友情の他にも、愛、死など様々なことについて考えさせられます。

注(*1) Of mice and men (Collectors Reprints, 1965) p. 57

(*2) 『ハツカネズミと人間』大浦暁生訳 (新潮社, 1994) p. 45

おざわ ふみひこ (係・情報サービス課)